



宝鶏工作機械グループ有限公司にて、「一帯一路」について意見交換をする参加青年たち(宝鶏)

日本・中国青年親善交流事業

Japan China Youth Exchange Program

「日本・中国青年親善交流事業」は、1978年の日中平和友好条約の締結を記念し、1979年から開始された事業で、日本・中国両政府が共同で実施しています。

日本と中国の青年が相互に相手国を訪問し、文化紹介やホームステイを通じた交流とともに、ビジネス環境・就職・ボランティアの状況などについて、両国の共通点や相違点などを掘り下げて考える機会ともなる大学生との意見交換、グローバルに飛躍をとげる中国の先進企業を訪問、起業をめぐるビジネス制度等に関連する施設の訪問等を行います。

[事業概要(派遣プログラム)]

活動内容： 文化紹介、ホームステイ(又はホームビジット)、地球環境問題、産業、教育、社会福祉、中国の起業をめぐるビジネス制度等に係る関連施設の訪問、中国の青年等とのディスカッション、政府機関等訪問

訪問地： 北京市、河南省、浙江省

※2019年度の例

参加青年数： 25名程度*

派遣期間： 11月頃(12日間)

*団長、副団長、渉外を含む派遣青年数は30名程度

※招へいプログラムや派遣プログラムにおける夕食交流会にて、中国招へい青年と交流・討論

【参考】招へいプログラム

招へい期間： 10月頃(12日間)

招へい青年数： 30名程度(団長・副団長を含む)



中華全国青年連合会を表敬訪問(北京)



日中青年友好フォーラムで「日本人と中国人」をテーマにディスカッション(北京)

■参加青年の感想



二口 朝香 (2018 年度参加)

「一帯一路」とは何か、という質問に、あなたは答えることができますでしょうか。私は答えることができませんでした。この事業に参加する前は。

事業への参加前、私は政治や経済、世界情勢について興味がありませんでした。「難しく、私には理解できない」という諦めがあったからです。派遣の事前準備として、世界情勢の勉強はしましたが、勉強すればするほどにその難しさを実感し、世界を学ぼうという気持ちは閉ざされたままでした。

しかし、**実際に中国に派遣され**、政府機関を訪問し、中国の人々と交流したことで、**私の意識は少しずつ変わりました**。中国の領土に立ち、中国の人々と目を合わせて話をし、彼らの口から、政治の話を聞く。そこには、テレビや新聞といったメディア越しではない、**ありのままの中国の姿**がありました。そして、政治という難しい話題の向こう側にあるのは、普通の人々の暮らしであり、自分の生活の中にも政治が根付いているのだと分かりました。

日本と中国の関係は複雑で、様々な壁が存在します。そんな中で中国という国に飛び込み、**中国側の目線から話を聞いた**ことは、とても新鮮な経験でした。また、中国の政治情勢を知ったからこそ、日本政府はどうか考え、方針を立てているのか、日本の政治を知りたいと思いました。

国家の問題である以上、日中関係の対立において、「何が正しいか」というのは果てしない問いです。中国側の意見を知った今だからこそ、その難しさを実感しています。私は、日本側、中国側、それぞれの立場を踏まえ、日本人という枠組みだけにとらわれない、**幅広い視野で物事を見ることのできる人になりたい**と思います。

また、この事業を通して、**自分の限界が広がりました**。以前の私は、自分の意見を伝えることが苦手で、大勢の前で主張したり、何かを披露したりすることはとてもできませんでした。しかし、この事業では、中国青年とのディスカッション、日本文化紹介のためのパフォーマンスなど、積極的に前に出て、表現することが求められます。初めは、私にできるはずがないと思っていましたが、派遣活動の中で日々出会う課題を乗り越えていくうちに、気が付けば、**主体的に行動し、堂々と人前で話すことのできる自分**がいました。

この事業を通じて、「できない」と最初からあきらめて消極的になってしまっていた自分の殻を破り、**「やってみればできる」**自分を見つけることができました。

この事業に興味を持ち、この文章を読んでくださっている方は、どこかで「自分を変えたい」と思っている方が多いのではないのでしょうか。この事業には、**自分を変えるあらゆるチャンス**が散りばめられています。



史家胡同博物館での太極拳文化講座(北京)



西安国際港務区規画館を視察(西安)



日韓青少年交流会にて記念撮影する参加青年たち

日本・韓国青年親善交流事業

Japan Korea Youth Exchange Program

「日本・韓国青年親善交流事業」は、1984年の日韓両国首脳会議における共同声明の趣旨及び1985年の日韓国交正常化20周年を踏まえ、両国政府の共同事業として1987年から友好の象徴として実施している事業です。

文化紹介やホームステイを通じた交流、地球環境、産業、文化、教育、社会福祉等の各種施設、先進企業の訪問や韓国青年とのディスカッション等を行います。これらを通じて、日韓関係の将来に向けたありようについて踏み込んで考え、どのような領域で青年たちが貢献できるのかを考えてゆく機会ともなります。また、日本に招へいした韓国青年と日本青年との「日韓青年親善交流のつどい」（合宿型ディスカッション・文化交流プログラム）等を行っています。

[事業概要（派遣プログラム）]

活動内容： 文化紹介、ホームステイ、地球環境問題、産業、文化、教育、社会福祉等の諸事情の研究、関連施設の訪問、韓国青年との合宿ディスカッション・プログラム

訪問地： ソウル、全州、金堤、天安、水原、加平 ※2019年度の例

参加青年数： 25名程度*

派遣期間： 11月頃（15日間）

*団長、副団長、渉外を含む派遣青年数は30名程度

※ 日本での「日韓青年親善交流のつどい」や韓国での「日韓青少年交流会」にて、韓国招へい青年と交流・討論

【参考】招へいプログラム

招へい期間： 9月頃（15日間）

招へい青年数： 30名程度（団長・副団長を含む）



韓国政府女性家族部を表敬訪問



日韓青少年交流会の討論会

■参加青年の感想



須摩 彩 (2019 年度参加)
(写真 2 列目左から 2 人目)

韓国派遣の中で一番記憶に残っているのは「日韓青少年交流会」です。これは 1泊2日で日本青年と韓国青年が寝食を共にしながら文化交流や討論会を行うプログラムです。

初日の文化交流の夕べでは日韓両国の青年がそれぞれダンスや歌、クイズを準備し、披露しました。私たちはなかなか全員そろっての準備ができなかった上、初めて人前で披露するということもありとても緊張していました。しかし、韓国青年がダンスに急ぎょ飛び入り参加するなど、積極的に参加してくれたおかげで私たちは自信を持って楽しく披露することができました。そして**音楽というものは言語の壁を越えた世界共通語**なんだと改めて感じました。ずっと笑いに包まれていた文化交流の夕べはもう1回体験したいと思えるほど本当に楽しかったです。

また2日目の討論会では、「多文化共生」というテーマの下、私は労働について議論をしました。それを通して日本の「技能実習生」が働く苛酷な労働環境の実態を再確認し、韓国では「技能実習生」という言葉は存在しないものと同じような問題を抱えていることがわかりました。そこから

「私たち青年ができること」として外国人労働者が情報に触れやすくするための多言語でのサイト運営などを提案しました。前日の文化交流の夕べとは打って変わって真剣な雰囲気全員が議論に取り組み、そのトピックから自分たちができることをグループ全員で考え、プレゼンテーションを行いました。議論が難航するときもありましたが、意欲的に発言をし、他の人の発言をきちんと聞くことで議論の終着点を少しずつ見いだすことができるようになりました。この討論会は韓国のことはもちろん、**自国のことについてもきちんと知る良い機会**となりました。

「日韓青少年交流会」のための準備はとても大変でしたが、その分とても有意義な時間になりました。そして私たちは短い時間でしたが、別れを惜しむほど仲良くなり、まるで前から知っていたかのような友人になることができました。**この事業は私にとって出会いと学びがあふれているもの**でした。日韓問わず一生の友人がたくさんできました。私たちは住んでいる場所は決して近くはありませんが、様々な媒体を通して私たちの団テーマである「情で笑顔の“わ”を広げる」のようにコミュニケーション（話）をとりながら笑顔（笑）、日本の心（和）、つながり（環）をこれからも大切にしていきたいです。



国立中央青少年修練院にて体験活動



華城行宮を訪ねる参加青年たち



社会保健省にて、プレゼンテーションを行う参加青年たち(フィンランド、2018年障害者分野)

地域課題対応人材育成事業 「地域コアリーダープログラム」 Community Core Leaders Development Program

多様な個人が能力を発揮しつつ、自立して共に社会に参加し支え合う「共生社会」を地域において築いていくためには、住民や非営利団体、行政機関等による取組の充実が必要です。

各地域で高齢者、障害者、青少年関連の課題解決に向けた取組に携わる日本青年を、3分野において特色のある事例を有する3か国に派遣する、専門職・組織マネジメント経験者向けの事業です。各国で同じ分野で働く同世代の若者との交流や政府機関・関連団体及び施設の訪問や意見交換等を通じて、国内外に広がる人的ネットワークを形成し、社会課題解決能力を高めます。

派遣国では、同様の課題解決に取り組む専門家との交流を促し、組織の運営、関係機関との連携、人的ネットワーク形成に必要な実務的能力の向上を目指します。また帰国後は、日本に招へいされた外国青年と一堂に会してNPOマネジメントフォーラムに参加し、外国青年とのディスカッションを通じて、日本の地域社会における課題解決に向けて中心的な担い手となる青年リーダー（コアリーダー）の育成を目指します。

【事業概要（派遣プログラム）】

- 活動内容： 先進的、特徴的な社会活動現場、関連施設等の訪問と意見交換、ホームステイ（家庭訪問）
- テーマ： 高齢者分野 「高齢者の自立支援に必要な連携」
障害者分野 「地域における障害者の社会参画の更なる拡大」
青少年分野 「子供・若者の育成支援に関わる人材の養成」 ※2019年度の例
- 派遣国： オランダ（高齢者分野）、イタリア（障害者分野）、フィンランド（青少年分野） ※2019年度の例
- 参加青年数： 8名程度×3か国
- 派遣期間： 11月（10日間） ※2019年度の例
- ※派遣プログラム後に東京で開催する「NPOマネジメントフォーラム」にて、招へい青年と交流・討論

【参考】招へいプログラム

- 招へい期間： 11月～12月（15日間） ※2019年度の例
- 招へい青年数： 8名程度×3か国



リヴェ職業訓練学校にて生活訓練コースの説明を受ける参加青年たち
(フィンランド、障害者分野)



ドルトムント認知症センターにて、認知症に関する啓発ポスターの紹介を受ける参加青年たち(ドイツ、高齢者分野)

■参加青年の感想

「**教育と児童福祉の連携を探りたい**」これが私の応募動機でした。私は公立高校で教員をしています。実際、教員をしていると様々な生徒に出会います。当然、経済的に厳しい家庭の生徒もいます。中には必要な福祉サービスにアクセスできていないと思われる家庭もあります。

その解決に向けて各地で実践されつつあるものの一つが「**スクールソーシャルワーク**」です。これは主として福祉の分野において実践されてきたソーシャルワークという手法を学校に適用させ、教育と福祉の連携を強化しようという取組です。しかし、日本でその取組は緒に就いたばかりであり、これから教育と児童福祉を連携させるためにも、その連携に**積極的に取り組む国を見てみたい**。そんな思いでニュージーランド派遣に応募しました。

実際に派遣で伺ったハット・バレー高校には、学校には教員以外にもカウンセラーやユースワーカーが常駐しており、生徒の様々な課題に対応できる体制が整えられていました。スクールソーシャルワーカーという職種の者はいませんでした。ユースワーカーが各機関との連携など、その役割を担っているようでした。生徒にとっては、身近に相談できる大人が教員以外に存在することは安心感になり、問題の早期発見につながるだろうと感じました。

また、カピティ・ユース・サポートやバイブという若者支援のワンストップショップのNPOは、若者支援の一次的な総合受入窓口であり、若者はこのNPOを訪ねれば、受け入れてもらえる上に、必要なサービスにつなげてもらうことができるというものでした。このようなNPOは日本ではまだ少ないかもしれませんが、スクールソーシャルワーカーの役を担う**NPOと学校が連携するということも考えられるのではないか**、そのようなことを感じさせました。

この派遣全体を通じて言えることは、ニュージーランドの青少年育成事業には**驚かされるばかりだった**ということです。**教育と児童福祉が連携しているというよりも、最初からそれらは一体であるという印象**でした。まさに「青少年育成」という言葉がピッタリとはまり、子供や若者、現場の声が大切にされている姿勢に日本が学ぶところは大きいように感じました。

また、この事業に参加して、学校教育以外の青少年育成に携わる団員と意見を交わしながら、ニュージーランドの青少年育成に触れることで、**普段当たり前と思っていた自身の活動を相対化**することができ、学びの濃い時間を過ごすことができました。このような貴重な機会をくださった関係者の皆様、派遣団団長と仲間感謝いたします。



渡邊 大介

(2018年度参加、ニュージーランド派遣団、青少年分野)
(写真2列目右から4人目)



ウェリントン工科大学にて、ユースワーク学士課程の紹介を受ける参加青年(ニュージーランド、青少年分野)



シャルロテンブルク=ウィルマースドルフ介護支援センターにて、ケースマネージャーによる説明を受ける参加青年たち(ドイツ、高齢者分野)